ヴェーダ祭式 Upavasatha と
仏教 Uposatha「布薩」：梗概

阪本（後藤）純子

1.　月が完全に姿を消す「朔」，および，満月になる「望」に，欲望を節制して祭火のもとで夜を過ごし（*úpa-vas*, *upavasathá-*），翌朝，新月祭ないし満月祭を行うことはヴェーダ祭式の基本であり，シュラウタ祭と家庭祭の両方で行われた．整備された祭式体系では，本祭前日早朝から翌朝までの全体が Upavasatha と呼ばれるが，本来は，日没から日の出までの行為である．その際，「食の節制」が重要な役割を果たし，動詞 *úpa-vas* は既にブラーフマナ文献で「食べない，断食する」の意味で用いられる．朔望（さらに上弦・下弦半月）に際し，特別な戒を守り禁欲して夜を過ごすことは，B.C. 5 世紀頃の民衆の生活に深く根付いていたようであり，ヴェーダ祭式を否定した仏教やジャイナ教にも取り入れられ，出家者および在家信者に実践された：Pāli *uposatha-*/*posatha-*, BHS *upoṣadha-*/*poṣadha-*, Amg *posaha-*，漢訳仏典「布薩」．仏教出家僧団の Uposatha は新満月祭 Upavasatha を継承して朔望の夜に行われ，戒律条項 Pāṭimokkha（BHS Prātimokṣa「波羅提木叉」）を朗唱し潔白を確認する儀礼である．在家信者の Uposatha は朔望日に加え半月の第 8 日にも行われ，八齋戒を遵守するが，特に「断食」が重視されたことがジャータカなどから窺える．Upavastha と Uposatha の比較は，バラモン教と仏教との関係を解明する上でひとつの重要な視点となろう．また「断食」の問題は，祭主の「責務」*vratá-*と仏教在家信者の「戒」*śīla-*/*sīla-* を理解する鍵となろう．

2.　祭式の背景：古代インド（放牧に基づく社会）の日常と暦

2.1.　放牧移住生活では，食事の主体が家畜の乳（加工品）と肉（加工品）である．食事回数は古くから朝夕 2 回とされる（AV VIII 10,21; ŚB II 4,2,3; TB[p] I 4,9,2）．食事の前，早朝（日出前後）*prātár* と夕（日没前後）*sāyám* に，搾りたての牛乳を加熱して祭火に献供するのが Agnihotra であり，祭火設置者の終生の義務である．搾乳は Agnihotra と食事の前，すなわち日出前と日没前に行われ，その間，昼間は村落外（荒野 *áraṇya-*）の牧草地（*gávyūti-*）に放牧され，夜間は村落内ないし近辺の

牧草地に囲い込まれるのが基本であるが，季節・地域・時代等の諸条件による変動すると推測される，e.g. AB III 18,14（牛たちは夜 *goṣṭha-*に，真昼は ***saṃgavinī-***［注釈 *śālā-*「小屋」］に）；TS[p] VII 5,3,1（1日3回搾乳）；TB[p] I 4,9,2（1日3回 *prātár*，***saṃgavá-***［→ **2.2.**］，*sāyám* に食を求めて牧地移動）．

2.2. 雌牛の母乳分泌には「仔牛が吸う，仔牛を見る，嗅ぐ」等の刺激が必要であり，搾乳には母牛と仔牛を繋ぐ綱と柱を用いる（ŚB-M XI 3,1,1, -K III 1,4,2, JB I 19 cf. 阪本 2008）．搾乳方法は古代エジプト・メソポタミアや現代モンゴルと共通する：仔牛を母牛に近づけ催乳する；仔牛を引き離し，人が必要量を搾乳後，仔牛に母牛から乳を飲ませ引き離す．仔牛と母牛は初乳期間（TB[p] II 1,1,3 生後10日間）をともに過ごし自由に母乳を飲むが，それ以降は昼夜ともに隔離され，搾乳時のみ催乳のため一緒にされる．1日1回，**朝の搾乳から Saṃgava まで**，仔牛は母牛と過ごし乳を十分飲む（TB loc,cit）．***saṃgavá-***「牛が集合する（している）こと（時）」は一般に「午前」の意味で用いられるが（AV IX 6,46, MS[p] IV 2,11:34,6, TB[p] I 4,9,2, ŚB II 2,3,9），「**放牧のために**牛たちを集める時」を指すと理解される（→ **2.1.**, **3.5.B**）．西村 p.27, n.22, p.86, n.301「朝，**搾乳のために**牛たちが一箇所に集められる行為」（cf. RV V 76,3 Sāyaṇa 註）は上記 TB と整合しない．仔牛が *saṃgava-*まで飲乳した後は，乳が涸れて搾乳が困難となる．

2.3. 新月祭 Sāṃnāyya 献供では，夕に搾った乳を *dádhi-*「酸乳」に凝固させ，翌朝に搾った生乳を加熱し，その混合を献供するが，ŚB I 7,1,10（ĀpŚS I 11,1, BhārŚS I 11,9, MānvŚS I 1,3,8）は Agnihotra に穀物水煮 *yavāgū́-*を献供した後 Sāṃnāyya 用に搾乳すると規定する．黒 YV には言及がなく通例の Agnihotra が予期される．

2.4. 古代インドの暦は太陽太陰暦であり，月の形により日を識別するため，「日没から日没まで（夜と昼）」が1暦日である（例 *amāvāsyà-*「朔の夜と後続する昼」）．しかし生活に便利な「日出から日出まで（昼と夜）」を1暦日とする暦法も併用され，ヴェーダ後期には一般化する（cf. Sakamoto-Gotō）．1朔望月は平均約29.5太陽日であるから，朔/望の起こる時刻は毎月ずれる．朔/望が昼間に起こると，前後の夜のどちらが朔/望か決定が困難であり，朔/望は各2夜あるという理論が形成される（→ **3.5.C**）．また，30日から成る大の月と29日から成る小の月が交替し，小の月の後半月 *pakṣá-* は14日間のみである．新月満月祭の開催時は *amāvāsyà-*（*rā́trī-*/*rā́tri-*）「朔の夜」ないし *pūrṇamāsī́-*「満月の夜」（*pūrṇamāsá-*「満月」）と規定されるが，仏教の Uposatha は半月の日付で表示され，出家者は第15日または14日，在家信者は第8・14・15日とされる．在家信者の場合，14日と15日との関

係が不明瞭である（→ **4.3.**）．他方，12朔望月（約354太陽日）と1太陽年（約365太陽日）との差が毎年約11日生じる．この期間，すなわち年末の11日間（12夜）はブラーフマナでは「第13月」ないし *upamāsa-*「閏月」とされ，Cāturmāsya 祭最後の Śunāsīrīya が行われる．仏教在家信者 Uposatha の *pāṭihāriyapakkha-*「特別な半月」（通称「神変月」）Suttanipāta 402もこの期間を指す可能性が高い（→ **5.2.**）．

3.　新月満月祭 Upavasatha における祭主の Vrata と断食

3.1.　動詞 *úpa-vasa-ti*，名詞 *upavasathá-* は「[祭火の］もとで（*úpa*）夜を過ごす（*vas*）」（「～こと」），特に朔望の夜，新月満月祭の祭主としての Vrata「責務」開始を祭火に宣誓し，その責務を遵守し禁欲して夜を過ごすことを意味する（→ **1.**）．しかし日没から1日が始まる古い暦法から，日出から始まる新しい暦法への移行に伴い，Upavasatha の意味が「日没から日出までの祭式行為」から「本祭前日の日出から次の日出までの祭式行為」へと拡大する（→ **3.5.**）．

祭式は，祭主が神々の一員として，神々を招き供物と讃辞で饗応する行為である．祭主の「責務」Vrata は祭式により相違するが，その中核は，神々の一員として人間的欲望を一時停止することである．具体的には，「食欲」「性欲」「睡眠」「虚言」等の抑制であるが，Upavasatha では特に「断食」が重要な役割をはたす．稀な例（→ **3.6.** GobhilaGS I 6,6）を除き「不眠，覚醒」は重視されない（Amano p.161, n.138, p.311, n.1009 *úpa-vas* “in wachsamen Abwarten übernachten” は適切でない）．

úpa-vas の語義は上記原義から「禁欲する」（MS^{p} I 8,7:126,4–6, cf. Amano loc.cit.; ŚāṅkhŚS I 3,1），さらに「（特定の食物を）食べない」「断食する」に発展する：TS^{p} I 6,7,3 *yád grāmyā́n upavásati*「もし村落に属するものを食べないならば」≈ ĀpŚS IV 3,6; *upa-vāsa-*「断食」：ĀśŚS I 10,2（注釈「1日1食」→ **3.6.**）

祭主の Vrata の中核に「断食」を置く黒 YV に対し，祭主の Vrata は「真実（*satyá-*）を語ること」であるという Yājñavalkya の革新的思想が ŚB 冒頭 I 1,1,1–11 に宣言される（阪本 2015 印仏研学術大会発表）．しかし，ヴェーダ後期には祭式を否定し苦行を重視する傾向が強まり，「断食」の重要性はむしろ強まる．

3.2.　黒 YV 古層散文には「王族の Agnihotra 禁止規定」（cf. 阪本 2005）が残る：KS^{p} VI 6:56,1–2（= KpS^{p} IV 5,7: 51,12–14; ≈ MS^{p} I 8,7:126,18–127,1; MS^{p} I 6,10:103,2–4; cf. MānŚS I 6,1,54; HirŚS III 7,19）*na rājanyasyāgnihotram asty. avratyo hi sa hanti. vrataṃ na vicchindyāt. paurṇamāsīṃ ca rātrīm amāvāsyāṃ ca juhuyāt. te hi vrataṃ gopāyati.*「王族の者には Agnihotra がない．彼は *vrata-*『祭主としての責務』を保持せず，打ち倒す（殺す）

から.『祭主としての責務』を切断すべきではない. 満月の夜と朔の夜に（Agnihotra を）献供すべきである. その二夜は「祭主としての責務」を守るから」.

Vrata に反して行動する王族には毎日の Agnihotra を行う資格がないが, 朔望の夜（と翌日→ **2.4.**）だけは新月満月祭の祭主として Vrata を守るので, その日没と日出の Agnihotra を献供できる. Vrata 遵守が朔望の夜（と翌日）に限定されているので, 日没の Agnihotra 直前に, Vrata 開始を祭火に宣言すると推測される.

3.3. 新月祭の前日午後に, 祭主夫妻は祖霊たちへ団子を献供する（Piṇḍapitṛyajña/Śrāddha）. この祖霊祭と新月祭の帰属関係は明瞭でないが（cf. KātyŚS IV 1,28–30）, 祭主が聖紐を逆向きにかけ祖霊の一員として祖霊を祭ること, 祭主の妻が団子を食すこと, ブラーフマナにおける独立した扱いなどを考慮すると, 祖霊祭の後, すなわち午後遅くに, 新月祭の Vrata を宣言し断食を開始すると考えられる.

3.4. 祭主の Vrata と断食の開始に関し, 黒 YV 散文に共通する定型表現がある: MSᵖ I 4,5:52,13f.「**敷草を持って**（***barhíṣā***）満月（m. *pūrṇámāsa-*）に［人々は］Vrata に近づく（開始する *upayánti*）のだ, **仔牛たちを伴って**（***vatsáir***）朔（の夜）には. **仔牛たちを［母牛たちから］引き離す前に**（*purā́ vatsā́nām apā́kartor*）**家長夫妻は食事すべきである**（*aśnīyātām*）」≈ KSᵖ XXXI 15:17,9f.; TSᵖ I 6,7,2「**敷草を持って**（***barhíṣā***）満月に［人々は］Vrata に近づく（開始する）, **仔牛たちを伴って**（***vatsáir***）朔（の夜）には. **これら（敷草と仔牛達）はこれら両者（満月と朔）が出向く所**（***āyátana-***）**であるから**」. 祭火の周囲には神々を迎える座として新しい敷草が播き敷かれる: MSᵖ I 4,10:58,3–5 ≈ KSᵖ XXXII 7:25,18–21 ≈ TSᵖ I 6,7,2f.「このように知っていて, **祭火の側に［敷草を］撒き敷くならば, 明朝に祭主として祭ろうとしているこの者のもとに諸神格は宿泊する**（*úpa...vasanti*）.」

「敷草と仔牛達が満月と朔の出向く所である」「敷草を播き敷く」という前後の記述から, 黒 YV 定型句の ***barhíṣā*** と ***vatsáir*** は「**物の同伴を表す Instr.**」であり,「敷草刈り」「仔牛引離」という「行為」の「時を表す Instr.」でないことは明白である. 祭式・儀礼に際し敷草の束を手に持つ風習はインド・イラン共通時代に遡り, 古代ペルシャ美術には草束を手に持つ人物像が多数見られる（cf. Ghirshman 図255 祭火の前で草束を持つ王と祭官, 図330 祭火の前で草束を持つ王, 図370 紐帯を左肩に掛け右手に草束を持つ人物, 図246 アフラマズダーと王と草束を持つ祭官, etc.）.

食事のタイムリミットである「仔牛引離」の時が原典には明示されていないが,「朔望の夜を過ごす」という Upavasatha の原義から「夕の搾乳後の隔離」と解するのが自然である. 他方, 新月満月祭の Vrata 開始・終了儀礼は祭式体系と

して未整備であり，ソーマ祭の Dīkṣā/Apsudīkṣā/Avabhr̥tha を摸倣する傾向が強い（→ **3.5. D**; cf. 阪本 2015 印仏研学術大会発表）．Dīkṣā も Vrata も開始前の食事は同名 *vratopānīya-*である．Dīkṣā の場合，黒 YV 散文では午後の沐浴前後に食事する（cf. 大島 p.58, n.99, p.75–79, n.171）．Vrata の場合も同様に午後に食事した可能性が強く，Gr̥hyasūtra に痕跡が残る（→ **3.6.** KhādiraGS II 1,4）．**結論として，黒 YV 散文段階では，午後（朔には祖霊祭の後）に Vrata 開始前の食事を取り，夕の搾乳後，母牛から引き離された仔牛達を伴い（または敷草を持ち）祭火に Vrata を宣言し，日没の Agnihotra を献供し，断食して夜を過ごしたと推測される．**

西村は当該箇所を数度引用し種々の可能性を論考しているが，p.41–43において引用・訳に続き結論を示す:「満月祭の場合には**祭官が barhiṣ 刈りに入るのと同時に**，新月祭の場合には**放牧の時点で祭主が vrata に入る**と解釈した．… 祭主が vrata に入るのは**日中の早い時間**と考えることになる．その場合には，*barhíṣā* 及び *vatsáiḥ* の Instr. に**時の Instr.** を想定し，『barhiṣ の時と共に』即ち『barhiṣ 刈りに取りかかるのと同時に』，『仔牛達の時と共に』即ち『仔牛達を母牛から引き離す時に』が意図されていたと解釈できる」．この解釈は Śrautasūtra，特に ĀpŚS IV 2,6 に合致するが（→ **3.5.E**），黒 YV 散文の原意とは認めがたい．

3.5. Śrautasūtra では，日没から日没までを1暦日とする暦から，日出から日出までを1暦日とする暦への移行に伴い，Upavasatha は新月満月祭の本祭前日（日出から翌日出まで）の行作全体を指すようになり，Vrata の開始も日没の少し前から，午前，さらに早朝へと前倒しされる傾向が生じる．黒 YV 散文では祭主と祭官の祭詞・行作が別途に扱われるのに対し，Śrautasūtra では実際の祭式遂行のために，両者の行為の時間的な統合が図られ，祭式行程が明示されるため，祭主の Vrata 開始宣言が何時か，Vrata 開始前の食事が何時か，活発に議論される．

A）BaudhŚS I 1: 1,1–2,4（≈ MānŚS I 1,1,12）： 祭主が Vrata を開始した後，祭官が枝を切断する（Sāṃnāyya 献供をする場合），バルヒスを刈る（しない場合）．

B）BaudhŚS XX 1: 4,9–13（Dvaidhasūtra）： 祭主の Vrata 開始時刻に関する諸説．Baudhāyana 説： 1）**Saṃgava**（→ **2.2.**）の時； 2）牝牛達の搾乳時； 3）本祭早朝に Praṇītā 水導入の直前； 4）供物が Vedi の上に据えられた時；Śālīki 説： **Saṃgava**（→ **2.2.**）の時；Aupamanyava 説： 前日早朝の祭火への焚木くべ足しの時．

C）BaudhŚS XXIV 20: 204,6–205,3（Karmāntasūtra）： 朔望ともに各2夜とする．仏教在家信者 Uposatha の第14日と第15日の併記に関係する可能性がある（→ **4.3.**）．

D）BaudhŚS XXIV 21: 205,10–206,5（Karmāntasūtra）： Upavasatha の 日（*upava-sathīye*

'*han*)，祭主は早朝 Agnihotra の前に薪と Vrata 開始前の食事（*vratopāyanīya-*）を準備する；同食をバラモンに渡してから食す（食べ残しを妻が食す）；寝台禁止；性交禁止；髪鬚剃りと爪切りと沐浴・軟膏は自由で，**Dīkṣā に倣う**．

E）ĀpŚS IV 2,6 ***barhiṣā*** *pūrṇamāse vratam upaiti*. ***vatseṣv apākr̥teṣv*** *amāvāsyāyām*「**敷草（刈り）と同時に**，満月の時に，［祭主は］vrata を開始する．**仔牛達が［母牛たちから］引き離された時に**，新月の夜には」．**3.4.** 西村説と一致する．

3.6. Gr̥hyasūtra における新月満月祭 Upavasatha 規定で注目されるのは，ĀśŚS I 10,2 *upavāsaḥ*「断食」（注 *ekabhojanam*「1日1食；特別食の後，断食」）；GobhilaGS I 6,1–12（特に6. Itihāsa 等を語り覚醒して夜を過ごす）；KhādiraGS II 1,4 *aparāhṇe snātvaupāvasathikaṃ dampatī bhuñjīyātām*「**午後に，沐浴した後，夫妻は Upavasatha 開始前の食事を取るべきである．**」Soma 祭 Dīkṣā を摸倣すると思われる（→ **3.4.**）．

4.　仏教における Uposatha「布薩」

4.1. 仏教出家僧団の Uposatha 制定は Vinaya Mahāvagga II Uposathakkhaṇḍaka（vol.I p.101–136）に詳説される．他宗派の修行者たちが，半月の第8・14・15日に集まり，人々に説法し信者を拡大していた；Bimbisāra 王の進言により世尊は比丘達に同様の集会・説法を許し，更に，比丘と比丘尼の Uposatha を制定する：半月に1度，第15夜（または第14夜），すなわち朔望の夜に，一定地域の出家者全員が *uposathāgāra-*「布薩堂」に集まり，戒律条項 Pāṭimokkha/Pāti°（BHS Prātimokṣa「波羅提木叉」：部派により相違；Pāli 比丘227条，比丘尼311条）を朗唱し，各条に関し違反の有無を確認する．日常的に出家者は1日1食（午前中に托鉢と食事；正午以降は断食）であり，性交禁止であるから，Uposatha 固有の禁欲はない．

4.2. 在家信者の Uposatha は半月の第8夜・14夜・15夜（の日）と「特別な半月」（Sn 402 *pāṭihāriyapakkha-*；「神変月」と訳されるが［cf. 平川 p.419f.］，12朔望月と1太陽年との差である「年末の約11日間」を指すと推測される→ **2.4.**）に行う．早朝から翌朝まで丸1日「八斎戒」を守る（cf. Sn 400f. *aṭṭhaṅgika- uposatha-*）：1. 殺さない；2. 与えられない物を取らない；3. 虚言を言わない；4. 飲酒しない；5. 性的純潔；6. 夜食・午後食の禁止；7. 身体を装飾しない；8. 大地（土間）に寝る．特に，正午以降の断食を重視する．Uposatha の翌朝，出家者に飲食物を饗応する（cf. Sn 403）が，新満月祭での神々への献供に対応する性格を持つ．Uposatha の日には，僧院に行き説法を聞くことが奨励される（cf. Sn 153）．

4.3. 在家者の Uposatha は半月の第8・14・15日とされるが，14日と15日の片方

だけ（月4回：四齋日）か，連続して両日（月6回：六齋日）か，明確でない．労働に従事する一般在家信者には，連続2日間断食し月6回八斎戒を実行することは容易ではないと推測される．大の月30日と小の月29日が交替し，小の後半月には第15日が無いこと，また朔と望の夜を確定することが困難であり（→ **2.4.**），朔望に各2夜あるとされたこと（→ **3.5.c.**）から，14日と15日と併記されても実際には片方1日だけ行い，月4回「四斎日」であった可能性が強い．Uposatha当日と翌朝の出家僧団への供養を合わせて2日間と拡大解釈された可能性もある．義浄の報告では月4回「4齋日」とされる（cf. 平川 p.428）．Jātaka散文（Gaṅgamāla-ja：Ja-a II 444,19f.; → **4.5.**）には「月6日」という表現がある．

4.4.　在家信者のUposathaおよび修行者の集会説法が半月の第8夜（日）*aṭṭhakā-*にも行われる背景には，この夜（日）も聖日として宗教活動が行われた伝統がある．祖霊祭Aṣṭakāなど家庭祭を中心とするが，Śrauta祭にも痕跡があり，特にEkāṣṭakā（Māgha月黒半月第8日）が重要な役割を果たす（cf. 阪本 2016 n.14/17/18; TS[p] III 3,8,4,f.; MS[p] IV 2,3:25,4 ≈ MānvŚS IX 5,5,12f.; MS[p] IV 2,12:35,20–36,1等）．

4.5.　後代の在家信者のUposathaがJātaka過去物語（注釈散文Jātaka-Atthavaṇṇanā）から窺えるが，「断食」重視の傾向が強まり，早朝から丸一日の断食が奨励される：月に6日，早朝に断食前の食事を取り，八斎戒を開始し，翌早朝まで戒を守り断食する（*sakala-kamma- uposatha-*「完全な行為（の功徳）を持つUposatha」）．午後，夕など途中から開始すると*upaḍḍha-kamma- uposatha-*「約半分の行為（の功徳）を持つUposatha」となる．断食を守り続けて死に至るという極端な例も語られる（cf. No.421 Gaṅgamāla-Jātaka: Ja-a II 444,17–446,10）．

〈参考文献〉

Amano, Kyōko 2009. *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II*. Bremen.　**Ghirshman, Roman 1964.** *Iran: Protoiranier, Meder, Achämeniden.* München.　**平川彰 1964**『原始仏教の研究』春秋社.　**西村直子 2006**『放牧と敷き草刈り』東北大学出版会.　**大島智請 2007**「ヴェーダ祭式におけるアグニシュトーマ祭の潔斎思想」博士論文（大阪大学）.　**阪本（後藤）純子 2005**「王族とAgnihotra」『印仏研』53(2): 941–947.　**阪本（後藤）純子 2016**「新月祭（および祖霊祭）の原初形態」『論集』43: 37–64.　**Sakamoto-Gotō, Junko 2010.** "The Vedic Calendar and the Rituals (1)."『印仏研』58(3): 1117–1125.

（平成29年度科学研究費補助金基盤研究（C）25370058による研究成果の一部）

〈キーワード〉　upavasatha, uposatha, vrata, śīla, 断食，新月満月祭，布薩，八斎戒

（元大阪市立大学助教授，宮城学院女子大学研究員，パリ第三大学課程博士）